

令和3年度 防衛大学校卒業式

来賓代表（谷内 正太郎様）祝辞

ご卒業、おめでとうございます。

いまこうして、壇上からみなさんを見回しますと、お一人、おひとりの顔が、引き締まっているのがわかります。

皆さんの背筋が、ずっと伸びていると、それだけで、わたしたちは、安心できます。防衛大学校での教育は、本当に頼もしい若者を、育ててくれました。教職員の皆さま、ご家族の方々、ご関係のすべての皆さまの、これまでのご献身、ご尽力に、感謝を申し上げ、心からなる、敬意を表したいと思います。

卒業生の、みなさん。

自衛隊員として、男女を問わず、国防の第一線に立つ、「さむらい」、「もののふ」の、みなさん。これから、どうか、肉体を、鍛錬してください。

靴を磨いて、ピカピカにしておかないと、なんとなく、一日、気持ちが悪い。ズボンにプレスがぴしっとかかっていなければ、心がたるんでいる気がする、という、そういう気持ちが、立派なサービス・マン、サービス・ウーマンを、育てるのだと思います。

同じように、毎日毎日、筋肉を鍛えなければ、なんとなく気持ちが悪いという、そういう隊員がいて、また、指揮官がいるとき、自衛隊は、強くなるのではないのでしょうか。そうは申しましても、強い自衛官は、やみくもに、ただ、腕っ節が強い人のことではありません。自分を大切にする人。それが、本当の意味で強い自衛官なのです。みなさんお一人、おひとり、ご自身のことを、大切にしてください。健康を保って、病気にならず、怪我をしませんように。そしてまちがっても、命を粗末に考えるようなことがないように、していただきたいと思います。

なぜかと申しますに、みなさんは、国の宝であるからであります。みなさんは、かけがえのない、命の持ち主であるからであります。いざというとき、「事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、もって国民の負託にこたえる」のが、皆さんです。国民を守るといふ、なによりも崇高な任務を帯びる皆さん自身が、自分の命を粗末に扱うとか、自分のことを、おろそかにする、軽んじるということがあっては、その、大切な責務を、十分担うことができなくなります。ひいては、国民の安

心も、守ることがおぼつかなくなります。そうならないよう、みなさんお一人、お一人、ご自分を大切にすることを、どうか、心がけてほしいと思います。

さて、これから皆さんが担う安全保障の環境は、ひときわ、厳しいものであります。ものの、一月前、ロシアが、ウクライナに攻め入りました。当初の話では、ロシアはウクライナ周辺とベラルーシで軍事演習をしているということでした。終われば帰る、撤収するということでした。そしてウクライナ東部に、2つの、にわか仕立ての傀儡国家をつくりました。その要請を受けたのだという理屈をこしらえて、ウラジーミル・プーチン大統領は、ミサイルを撃ち、地上部隊を送り込んで、ウクライナに攻撃をしかけたわけであります。

その後、ロシアの攻撃は、原子力施設ですとか、重要インフラを狙い、また、市民の命と暮らしを随所で破壊してきました。このような進め方、戦争の始め方は、歴史上、今度が初めてではありません。まるで百年前と同じような光景が、21世紀に生きる、わたしたちの前に出現しました。それは、ロシアのような大国が、武力を実際に行行使して、弱い国から、奪えるものを奪おうとする光景です。

卒業生の、みなさん。みなさんが任官し、歩みを進めていく世界は、そういう、情け容赦のない世界なのだとすることを、肝に銘じておいていただきたいと思います。軍事力を、利己的な、自分だけの利益のために使い、他国、他人を攻撃してはならない。これは、揺るぎのない、確立した、世界のルール、国際法であります。それをプーチン大統領は、躊躇うことなく、破りました。その一点、その、ただ一点だけでも、プーチン大統領のロシアは、越えてはならない一線を越え、明白な、罪を犯したのだと言えます。

卒業生の、みなさん。みなさんは、この事態、ロシアがウクライナ侵入という歴史的な一大事から、汲み取るべき教訓を、きちんと学ばないといけないのだと思います。教訓とは、つまりこういうことだと思います。軍事力を信じ、それを使うことに躊躇いがない国がいるとき、こちらにとれる手、選べるオプションは、たったひとつしかない。こちらも、同じように、強くなくてはならない、ということであります。

わたしたちの周辺には、ロシアがいて、核とミサイルの開発を続ける北朝鮮がいて、2049年、建国以来百周年を迎えるまでに、台湾をなんとしても自分のものにする、と世界に向かって公言している中国がいます。ウクライナでロシアが起こしたことは、わたしたちの周辺で、いつでも起きかねません。日頃から鍛錬をやめないさむらいたち、もののふたちがいてこそ、相手は、日本に手出しがしにくいのだと思います。実は、敬意を寄せてもくれます。

わたくしは、2014年、国家安全保障局ができたとき、局長に就任致しました。当時と比較して、できるようになったことの一つは、日本の存立にかかわる重要な事態となったとき、日本と米国が、自衛隊と米軍が、一緒になってお互いを守り、日本を守ることが可能となったことでもあります。ふだんから、何もないときでも、米軍の船や飛行機を、自衛隊が防護することが、できるようになりました。

しかし、まだまだやらなくてはならないことは、いろいろとあります。日本の安全保障のために、出来ることは、全てやらなくてはならないのだと思います。与那国島の、自衛隊駐屯地から台湾までは、僅かに110kmであります。今わたしたちがいる防衛大学校から、富士山の火口までが90kmだと言いますと、距離感、近さをわかってもらえると思います。これから暫くの間、与那国島など、わが国南西方面が、わが国の最前線、そして、自由世界全体の、フロントラインだと、いってもいい場所になると思います。

南西諸島を守る皆さんの先輩が、安心して防人の任務を務めることができるよう、わたしたち大人は、出来ること全て、試みていかなければならないと思います。自衛隊創立以来、みなさんの先輩たちが続けた営々たる努力、たゆまぬ献身は、自衛隊に対する国民の信頼を、揺るぎのないものにしております。世論調査をいたしますと、回答者の、じつに8割は、自衛隊を信頼する、と言います。ほかの団体、どんな組織にもまして、不動の一位であります。

卒業生の、みなさん。どうか、このことに、誇りをもってください。自衛官という職業を選ぶことは、国民の尊敬を勝ち得ることなのだと、そう思い、誇りをもってほしいと思います。

さむらいよ、もののふよ、誇り高くあれ。

これで、わたしの挨拶を終わります。

令和4年3月27日

谷 内 正 太 郎